

特67

409

第壹編

引續出版

當乃乃 感優 三井 後狂 題 記



甲府樓町 三下 采由 水山 御印 枚

074815-000-0

特67-409

甲府演劇記 第1編

遠藤 甲斐吉 / 編

M14

CEK-0152



鹽現 輝仁王利益 (三井座報)

本舞臺三間小高草土手後ろ淺黄幕一面の敷懸上手御判行下
手覆の大樹日影より同釣枝舞臺前しがらみ付の浪板都て鳥川
堤の横儀宜敷在郷明にて浪の音にて幕開く○今日位へ長日並
はねトやわねへか△夫たから出掛て来たが今日は一番果を
かへて浪除から六兵衛新田の後をせぐつて見やラトやわねへ
か○そりやアいと思ひ付た此間も溝際の際六が素敵につまか
宜いと云つたから形かあるよ送へねへ△今が丁度いと汝時だ
出掛やうじやアねへか○そりやアい、が勢の付くやうに勘六
酒屋で一杯どんだ△今出掛に遣つたトやアねへか○そりやア
歩行たうちに醒て仕舞た△仕方がねへ是も附合た○其通り
くからアゑては酒でつられるのだ△穴舌を云はずと出掛や
うか○サア行やせうトやはり浪の音にて若イ衆は「手へ通入
る際馬子唄になり向ふより黒の衣流し大小浪人者の拵らへ
須の助(淀五郎)疵藏(鶴吉)墨太(尾登造)初かきの拵らへにて
四ッ手親を擔ぎ山來り親を下す(淀)竹筒を前に置き乗れと上

げ出來り花道にて(淀)コヤ〜親の若衆は何と申處トや(鶴)
爰が鳥川の細手で五りやす(尾)余ッ程骨を折せやしたヨ(淀)
左やか大々早い事て有たト捨置詞にて本舞臺へ來り親を下し
て(鶴)草履を直しへイ旦那は約束の所で五りやすト(來)親よ
り出て思入有てム、大義で有つたマテ渡場迄はまだ余程有る
かな(鶴)直向に見ゆるのが渡船場で五り升(淀)左様か貴様達
も商賣とは申午ら中々違者の事である思ひ此外早く来た(尾)
そりやア自慢トやア五りやせんが此海道トやア二人ながらひ
けを取らねへ人足て五り升(淀)左様に見請たわいと云ひ乍ら
紙入より金を出し紙に包んで是は些少トやが取てかきやれ
(鶴)へい〜難有御座ります榎組駄賃をくだつた(尾)旦那
有難五座りますト(尾)紙を開き見て(鶴)モン旦那へコリヤ赤
で御座りやすね(淀)五百文の極めなれど其方共が骨折もわ
れバ残りは酒手に遣すわ(鶴)へインナラ残りは其酒手か
ねコウ榎組五百の残りが酒手だどよ(尾)笑らかしやアがれ茶
漬屋の下女トやあるめへしお釣を貰て禮を云とは譯が違わ
レツコリどよなるものか(鶴)モン侍さんへ御親切は難有

甲辰九月廿二日

御座りやすがコリヤア頂たもトト事御座りやすからか返し申そふよ(淀)何と申す然らば酒手が不足トやと申すのかト急度云(鶴)一ノ仰の通り不足さね(淀)何んト合方キツパリとナリ(鶴)是さく何もそんなに目をむき出すにやあ及びやせん御座りのせり符だが長口上は御座居だちつと出来の雲助とは代物が違ひやすから其積りで身元を見て物を云てお呉んなせへ(尾)トシメ鈴森トヤアねへが焚火に當つて鳥の掛るを待て居る皆くせり符の雲助たア譯が違ふわへ何んば目が利ねへといつて片目斗リトヤアあんまり人を安くするな(鶴)四も五もいらねへ私等の身分相應酒手をバキリく出しておくれなせへナト是にて(淀)むつとせしが心を取直し思入あつて(淀)成程コリヤ其方が中所も尤も至極トや某も初めて旅の事故順と旅体は不案内トや氣に障らば免して呉りやれ不足と有らば今二百文も酒手の増を遣るふ程に心を直して一杯呑んで呉りやれと懐中へ手を入る(尾)サイく穴談を云つちやアいけねへせ地切の長ぢやア有めへしあんまり細々ささみやアがるな(鶴)所詮話しやア分らねへこんな化痴な野郎にやア酒手

はウヌに呉れて遣るわいと以前の金を(淀)の顔へ打付る(淀)ム、ト思入れ(鶴)コリヤ九十九百と云ふ御しきせり符の酒手だがモウ云へたとて無法話たらつち二人りも商賣づくだ重い思ひを志て只歸つちやア商賣利だ酒手の替りに存分に夫丈け腹を思にやアならねへ(尾)ソウメくコンナいくちのねへ奴は懲くする様に引脱で身ぐるみ脱がせて赤つ恥をかませて遣つたら此後は少し性が付くたろふよ(鶴)此んな蛙面奴にやア口で云つちやア分らねへイケ張合のねへ二本棒めと(淀)の肩へ足を掛けて蹴飛ばす(淀)口惜しき思入(淀)大事の前の小事と思ひ在あらぬ体に應しらへバ附け上つたる悪口難言其上ならト武士のものを(尾)ム、土足に掛けてもこちと等に(鶴)罰が當て(兩人)たまるものがへと兩人にて須の助の顔へつバきを吐きかける(淀)ム、モウ丁簡がト刀の柄へ手を懸るをハット思入(鶴)何だく刀の柄へ手を懸やあがつて已れを切る氣だなア(尾)コリヤ何んだナ耳くじりへ手を懸て燃して酒手を踏む氣だなア踏まれるなら踏んで見ろソナ耳口な雲助トやないぞ東海道が五十三次中仙道が六十九次何處の

立場へ面を出しても込みやれた事のねへ(鶴)口の状様だア已れを切りや手前も本有だ(鶴)ヤイ差考た刀は看板かナセ手を掛けて切らねへのだ早く抜て切りやアがれど土足にて刀の柄を蹴る(淀)無念の思入(尾)脇差の柄へ手を掛けて是を抜て切らぬへのか(淀)中々以て左様云譯では(尾)イ、ヤ切る氣だ(淀)何様してそなたを(鶴)エ、面倒だ已れが抜て切られて遣るわと又(尾)柄へ手を掛るを(淀)抜せまいと尋そひ無理に(尾)刀を引さ抜さ見て悔り思入(淀)面目なきこなし(尾)ヤアコリア竹光だなア(鶴)ナコ竹光だ迷ねへ竹光だコイツハ侍の如何様者だなア(尾)此マラテ驚し掛け我りや銀金を動するのたなア見掛けに依らねへ太へ奴だ(鶴)此んな加せ者にあらざれちや已等が飯が食へねへ大方此方も如何様だろラト一ト腰へ手を掛る(兩人)遣るまいと双方争ひいる爰へ上手より茶火夫(扇十郎)ふつさき羽織大小旗形ふけたる侍の持らへにて一文字の背笠を持ち割掛けを肩にかけ争ふ中へ割て入り兩人を突き飛ばし急度なる兩人茶火夫を見て(鶴)や侍がまだ一人居たぞ(尾)大方手前も合摺りだろ(鶴)二人りが邪魔を(兩人)何

んでするのだ(尾)邪魔は致さぬ扱ひには入つたのトヤト此時(淀)扇を見て(淀)ヤ貴様はト云を押へて(扇)イヤ知らぬ何んにも知らぬが武士の身は相身互と申もの何卒身共に預けて呉れ(尾)何んだ豫けて呉れ是れはあんまり落付て物を云ふな此侍が囁りだから已等二人で成破するのだ(鶴)種も知らずにうつかりと詮言な口を聞なさんな(尾)何んにも云はせど其間の方へ引込んで無言で見物(兩人)するが良いわね(扇)サア身共が中へ遁入たからは其方共が氣に入るかいらぬかは知れね共相應の挨拶は身共が致して遣そふ(尾)成程コイツハ些と話高が分る左様だ高が此云不筋の話しは已らが然へ只乗つて酒手を出さずに強面で(鶴)此竹光で威しかけ茶手の孫三で踏む氣だから已等二人りも黙然ア(尾)此引込みが(兩人)付きやせんのさ(尾)成程ソレハ尤も至極シテ其酒手トヤラハ何程遣せバ宜と申すのトヤ(扇)ソリヤアか前酒手だから短干と云ふ相扱は無のさ(鶴)扱ふ氣ならわつちらの面の立やうに見斗ひさね(尾)如何様コリヤア何程ト定めはあるまい先づく待ちやれト思入あつて緋の胴巻より金を出して三兩程紙に包み跡を

懐に入れてコリヤ身共が心斗り定めて氣には及ふまいけれど
是で丁節して呉りやれト渡す(淀) 胸巻へ一寸口を付る事あつ
て前へ出て(淀) 貴郎様の金子をバ(扇) ハテ御遠慮には及び申
さぬ是も時の災難イヤサ最前よりの様子と云ひ身共が胸に御
座る程に先づ拙者にお任せ成されませ(淀) ソレデハ何様も
(扇) ハテ心配には及び申さぬと此内(扇) 金を改め見て
(扇) モシ旦那へ此方等の十分にやア片手共云ひてへ所御座
りやすが(尾) ね前さんが挨拶だから些と安い者だけけれど
(扇) 是でお負けと(兩人) 致しませうよ(扇) 然らば夫れで得心
と申すか(兩人) 大負けで五座りやす(扇) や夫れにて身共も中へ
這入た甲斐があるを申すものトや得心とあらば其方共は早く
歸つたがよひ(尾) 歸りやす共くゝゑて此んな時の引込にやア
ひびい目に逢ものだ(扇) 何今時はそんな立役ははやらね(な
ア(尾) そふよ其善よ文明開化の世界に成てそんな舊弊を一洗
したのだ(扇) 強氣に六ヶ敷でやアがらア何だ姿を拵て合戦を
する(尾) そふトやね(扇) 舊弊を一洗したのよ(扇) 合戦をされて
たまるものか(尾) エゝ分らねへ野郎だ(扇) みたを申させ早く

もきやれ(尾) モシ旦那渡場迄乗せませうかね(扇) エゝごまを
するなへ(尾) ヲラ格め摺込のが今の流行だト兩人思入あつて
想をかき下手へ這入跡合方になり(淀) 面目なき思入有て竹光
を納め(淀) 素太次殿面目次第も五ざりませぬ(扇) イヤゝゝを
のほしんしやくには及び申さぬ其許さまとは津津に於て不圖
知る人と相成て湯治致す其間にゝには元より好める圍碁を
圍み云々云ふせりふ有て斗らせ背殿の五羽義をお救ひ申も
是を盡せぬ縁でこそ五ざりませう(淀) 武士たるもの、有ま
トきひつゝ下郎に罵しめられ手出しのならぬ拙者が帯刀無念
はきもに答ゆれど蓄へ盡し拙者が薄命五推量なされて下さり
ませ(扇) 其は悔はざる事ながら未だ血氣の貴殿なれば願て仕
官の致されなば其時節の錦の小袖是が前所世の盛衰で五ざり
まするデトこのとき(扇) 持し竹筒(目)を付けイヤ何(扇) 貴
殿の御所持成されたる其竹筒は何等の器で御座りまするな
(淀) イヤモれ尋ねに豫りぬ血脈儀にて御座り外れは尾羽打ら
括らせし浪の業とて御座らぬ故次第に細る葦中故魂
迄も斯の如くの任せ此竹筒(米)を時へ木錢の旅籠に儀へを

凌の拙者が命の器で御座ると出して見せる此時節の中より
米を少しおぼそ(扇) 左様で御座るか夫れば少しも恥辱には御
座らぬ中々風流なる事御座る何とやら申す非人が瓢を用ひ
し例も有ればコリヤ一段の器で御座り外なるト時の鐘アリ
ヤモウ入相と相見ゆる天目氏には之より何れへ(淀) 拙者は是
よりサト仕官の望みも御座れば東の方へ志ざし外(扇) 然ら
ば是より御同道な仕り夜ト共草津の團扇の歌を(淀) エ、久々
にてお相手仕るで御座り外(扇) 尋る故に遇ふたる心持樂し
みな事御座り升サアゝ参らふでは御座らぬか(淀) 御同伴
致す御座り升ラト浪の背在御唄の合方に成り一ト事より
下りて東のあもみへ掛り兩人拾遺符にて大あもみより花道へ
か、る此内舞臺知らせなすに道具廻る本舞臺後一面在体流
れのある遊見上の方に猿張の渡し小屋並下げてあり此場に鳥
川渡し場ト印したる傍示杭下手柳の立樹日覆より同敷釣校を
つと下手に蘆原都て鳥川渡船のもやうよろしく右の鳴物にて
道具廻るトハヤゝゝになり向ふよりいせんの想かき(扇) (尾) 尾
出来り向ふへ思入あつて(尾) コウ蜀太さつき場場浪人から

二人りへ頼むと請合たアノさんびんをばらすこんたん(扇) 何
を云ふにも相手は侍うかつに手出しもなるめへから何ふかこ
んたんしぎアなるめへ(尾) 何にしる手ぶらトヤアはんのんだ
何ぞい、くふうが有そふなものだ〇ム、あるゝ墨太なにか
切物のさんだん出来ねへか(扇) 切物をさんだんしるといつて
爰は川原の渡場だ何そんなものがあるものか〇トわたりにあ
るナクを見付あつとあるゝ此れトヤアどうだ(尾) 成程此
ア(扇) さびのわんぱいは云ひ大そふはがこぼれて居るトヤア
ねへか(尾) そふよ形がナクで齒が露りこいつア博覧會(山品
のんだせ(扇) しかし相手がさむだからこんなものトヤアけん
のんだト邊りにある船掉の細ひのを見付け、幸の此船掉
こいつを切て竹筒とは何様だ(尾) コウ樺組頼太十段目の光秀
トヤアねへがねらつた王と間違て浪人者を突ちやアいけねへ
せ(扇) ム、そんなをトをするものかへコウ仕度が出来りや
の一人り位へは茶葉の粉だ(尾) マチヨそふ茶にしちやア居ら
れね(遙か向へ来る様だせ蜀太耳をよこせと片播りをする

(鶴) さそんなに小家へ(尾)エ、静にしる時代な野だなアと此
時雨車になり(淀)扇(尾)伴ひ出る(淀)コリヤ被刺て参り升た
(扇)秋の空とは申し乍ら定らぬ日和で因た皆で御座る(淀)最
早渡場で御座るが雨具の御用意は如何で御座るナ(扇)雨具の
用意はして参つたが貴殿は如何で御座るな(淀)拙者は期る仕
合なれば雨具の貯へも御座ぬが強つるよりも御座りますまい
此渡し小屋で少々雨宿りを成されては如何で御座る何さま暫
時雨止みを致して参らふと(扇)小屋の軒下へ這入る此時後ろ
より竹鉾に(扇)肩先を背く(扇)ワット苦しみたじくと成
る此時小屋の内より以前の(鶴)尾竹鉾を持ち出て又(扇)に
突て懸り(扇)苦しみながら一ト腰を脱き滅駄矢駄に切りか
る此時(淀)は後ろに居て(扇)の斜歩處を蹴飛ばし是にて例とな
る處を刀を肩先へ突通る荒雨此時(扇)苦痛の思ひ入れにて
(扇)何奴なれば物をも云はせ欺し打ちとは異怯な奴な(鶴)
きと竹鉾子トヤア武士と雲助何様して相手に成ものか物取た
から異怯の言た(尾)金が敵だ仕方かねへ文句を云わせと往生
かね(扇)ソッナラ口は物取よなア(鶴)其物取の先達は爰に

居る(兩人)親玉だとは(扇)淀を見て(扇)ヤ、其方は天目須
之助ソッナラ已等三人は(扇)云合て(兩人)仕た仕事だ(扇)ム
ト口惜し思入(淀)拵ぐと捨石へ腰を掛け煙草香乍(淀)モウ
幾等苦痛ても其深手トヤア御暇乞だア併し此仁息の根を留て
仕舞も曲かねへつくり咄しを聞せて遣らふよ手前達も喫煙
やれ(鶴)我等も爰で先生の(尾)詰切でも(悲)聞きやせうよト
眺への合方申笛を應答(扇)苦痛の思入(淀)思入あつて(淀)チ
イ素大夫 お前に恨みは少ともねへ恨み處か湯治場で世話に
ア成つたが遺恨はねへ所が怨の出来心此前が草津を立た時に
散らりと眠んだ胸巻の重みを引た駕かきの二人を頼んだ御器
置で酒手の金の五十兩ある積りで竹光の鞘を拂た息枝も肩を
入れたる拵のペリの口の四苦八苦何んにも自氣の竹筒も割
て咄しやア此中へとめて置のは織月形息が有たら保しからふ
がしやりかしやれかは知らねへが儘にならぬが浮世だから已
れが末期の水加減で地獄の釜で往生じやれさト刀を引抜く
(扇)口惜しきこなしにて(扇)ヤスリヤ竹筒の其中へ隠し置し
は織月形とな(淀)チ、三年跡に鎌倉へ我が豫りて行く途中に

待ちかけて盗んだは其頃天目の盛六とて仁王の姿で人を威し
盗みをしたも此の須の助廻りく又已れに殺さる、とは因
果な奴だ(扇)扱は織月形を奪ひしも(淀)已れで有つたな
ア現在帯る一ト腰が目先にあるを取る事なら走其盜賊に殺さ
る、とは能々武進の盡きたるなり(扇)ナエ、口惜しい(淀)愚
痴をいはずと死朽て終へ(淀)は(扇)を切倒す(鶴)只苦しま
せるも殺生だ爰等で眼を遣りやせうか(尾)ソウユ余り悪威の
も色氣かねへ(鶴)幽分是でも深山だ(鶴)ソラか眼が出た勝手
な處へト(扇)へ防がり止めを突してうしやアがれと是にて
(扇)ハット苦しみ落入る(鶴)爰等の處は先生の遣る仕事だせ
(尾)爰が已れの設けものだ此内(扇)此懐より胸巻を引出
し懐ろへ入れる(尾)鶴死骸を川へ踏込む中々人を殺すのは
餘程骨の折れる仕事だ(尾)先生二人の手際は(鶴)何んな物で
(兩人)御座りやすへ(淀)イヤ御苦勞く併し是斗りの木葉仕
事てコウ骨を折ちやア割に合ねへ(尾)へいあんまり左様も行
かやすめへ(鶴)私等が目には大仕事だ(尾)骨折り代はねへモ
ト旦那へ(鶴)エ、忍かきの口調は誤るせ(尾)ソイ口癖に成る

奴(淀)サア分け與だ二人共に手を出さのしト懐の内にて
小判を十枚程出して並べる兩人是を見て乍笑して手を出すソ
リヤ手前によと(鶴)の手の平へ一枚打ち付けて遣る(鶴)ナッ
ト善しく(淀)ソリヤ貴様だト一枚打ち付けて遣る(尾)來
りくト兩人乍笑して矢張手を出して居る(淀)残りの小判を
懐ろへ入れる兩人顔見合せ(兩人)跡は何様だへ(淀)未だ手前
遣はる氣か(兩人)あんまり是トヤア(淀)釣りでも來るのか
(鶴)エ、ト兩人手を引く(淀)へト肩で矢を木のかしら(淀)堅
へ人だのと荒雨思入 兩人は呆れしこなし此仕組宜敷キザミ
よて拵子跡跡時の鐘にて繼にて直に引返す
跡は引續き近日出版仕候間當狂言と諸共に御求め
評判の程願 上候



本家 伊勢國三重郡小古曾村 河村古僊 謹白
 右賣藥野店にて賣捌候間何卒澤山御購來之程奉願候
 大取次所 同 平府櫻町四丁目東側荒物出屋 服部新兵衛
 柳町三丁目大横丁北側入 堺屋與兵衛

備急 開達丸 小大 瓶 入金 六十錢
 要藥 開達散 小中大 同器 入金 拾貳錢
 同器 入金 六錢

明治十四年三月廿二日御届
 同年同月廿五日出版

山梨縣平民
 編輯人 遠藤甲斐吉
 西山梨郡櫻町
 二十三番地寄留

山梨縣平民
 出版人 中山錄朗
 西山梨郡櫻町卅六番地

(定價金四錢)